

次世代っこにMy盆栽を！ ～季節を楽しむ盆栽の魅力～

代表者 小林 由佳（経済学部経済学科2年）

1. 目的と概要

現在、海外において日本の文化や伝統工芸は『cool japan』と評価されており、盆栽も『BONSAI』の表記で海外からの人気が高まっている。

一方、香川県高松市は松盆栽の全国シェアの8割を占めているにもかかわらず、国内における高松盆栽の認知度は低く、若い世代には親しみがなく、後継者不足という問題を抱えているのが現状である。これらの

背景には、一般的に盆栽に対して抱かれる「男性」「高齢者」「高価」のような親しみにくいイメージの影響があると考えられる。

そこで、世間のイメージとは正反対の私たち女子大生が、プロの盆栽作家と盆栽に興味を持つ初心者とを繋ぐ架け橋のような存在となり、高松盆栽の認知度向上を目指すことを目的としてこのプロジェクトは発足した。本年度は、主に小学生や高校生を対象とし、ワークショップを開催した。



2. 実施期間（実施日）

令和2年9月1日から 令和3年3月31日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

今年度の事業では、香川県内のコミュニティセンターを中心に小学生向けのワークショップを実施した。新型コロナウイルスの影響を受け、出だしは遅れたものの、結果としては計5回の子供向けワークショップを実施すること



↑ 感染症対策の実施

ができた。

1回目は8月19日に十河コミュニティセンターで行った。参加者は17名であった。緊急事態宣言が明けて初めてのワークショップであり、参加者が集まるか不安だったが、事前に感染症対策について提示していたこともあり想定以上の参加者を集めることができた。

2回目は11月8日に大町コミュニティセンターで行った。今回は定員を20人とし、密を避けるため10人ずつに分けて2部制で開催した。昨年度もこちらのコミュニティセンターでワークショップを開催したため、参加者の募集や準備をスムーズに進めることができた。

3回目は11月28日に多肥コミュニティセンターで行った。今回も10名ずつの2部制で実施し、定員一杯の20名が参加した。今回は参加者により楽しんでもらえるよう苔玉の飾りつけも行った。自分で作った苔玉に思い思いのデコレーションをするのは楽しかったようで、満足していただけた。

4回目は1月30日に木太コミュニティセンターで行った。参加者は定員20名のところ14名と少なかったが、いつも以上に子どもとのコミュニケーションをとることができた。参加者募集のチラシの配布が遅れたことが定員に満たなかった原因であると考えられるため、今後は改善していきたい。

5回目は2月20日に屋島コミュニティセンターで行った。参加者は定員15名のところ14名であった。今回も飾りつけを実施し、参加者からは楽しかったとの声があった。飾りつけの満足度は高く、今後も実施していきたいと考える。

また、今年度から新たな取り組みとして、高校生向けのワークショップを実施した。高校生向けのワークショップでは、苔玉づくりに加えて、香川大学の紹介や大学生活の紹介、質疑応答の時間も設けた。高松盆栽の魅力だけではなく、香川大学の魅力や高校生の不安や疑問にも答えられるいい機会になったと考える。実際に参加者が回答したアンケートには、大学生目線から大学についての話を聞くことができ良かったなどの声が多く寄せられた。今年度は12月11日に高松商業高校と高松第一高校の計2校でワークショップを実施した。参加者は計56名であった。今年度からの新たな試みであったが参加した高校生の満足度は高く、私たちも新たな層へのアプローチができた実感できたため今後も継続していきたいと考える。



↑大町コミュニティセンター



↑飾りつけの様子



↑大学生活の紹介の様子

これらのプロジェクト事業により、小学生・高校生といった若者を中心に多くの方が盆栽に触れる機会を創出できたと思う。また、ワークショップの開催により地域の方との交流を深めることができた。今後も事業を継続し、盆栽の魅力を伝える機会や地域の方とのつながりを大切にしていきたい。



↑ 高松商業高校



↑ 高松第一高校

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

この事業を実施したことにより、高松盆栽の認知度だけでなく、香川大学や Bonsai ☆ Girls Project の認知度も向上したと感じる。昨年度に引き続きメディアに取り上げていただく機会が多く、同時に自身の SNS での情報発信も活発に行ったことが影響していると思う。例えば、地元タウン誌「香川 komachi」での毎月連載や地元インターネットメディアの「ガーカガワ」による取材が挙げられる。さらに、今年度は高校生向けのワークショップにて香川大学の紹介やプロジェクトの紹介を行った。大学受験を控える高校生に向けて、香川大学の魅力や香川大学ならではのプロジェクト活動について PR することができた。



↑ 香川 komachi

地域社会に与えた影響としては、香川の名産品である盆栽を通じて地域活性化に貢献できたと思う。また、定期的な盆栽教室やワークショップの開催により、地元の盆栽作家やコミュニティセンター、学校とのつながりを持つことができた。さらに、プロジェクト活動を通して、私たち学生も責任感や協調性など社会に出て役立つ能力を培うことができたと思う。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回のワークショップは小学生・高校生を対象としたものであった。小学生向けのワークショップでは、普段のワークショップでは気づくことのできない子ども目線からの盆栽づくりの難しさに気づくことができ、様々な視点から物事を考えることの重要性を学んだ。さらに、盆栽の飾りつけのように子供たちに盆栽を楽しんでもらう工夫をすることもできた。高校生向けのワークショップでは、新たな試みであることから従来のワークショップとは違うことを取り入れようとメンバー間で意見を出し合った。そして、香川大学の紹介や大学生活についてのプレゼンテーションなどを実施し、参加者からは

高い評価を得ることができた。マニュアル化した活動の中に新たな要素を加えることで、主体性・発想力が身につき、やりがいを感じることもできた。また、コミュニティセンターや小学校の方との交流を通して礼儀やマナーを学んだ。

6. 反省点・今後の展望（計画）・感想等

今年度の反省点は大きく2つある。

1つ目は、報告・連絡・相談がおろそかになってしまった点である。ワークショップを開催する際、イベントごとに先方との連絡や準備を行う担当メンバーを決めて、計画を進めていく。しかし、その担当の進捗がプロジェクト全体に共有されていなかったり、連絡に遅れが出て参加者が定員に満たなかったりという問題が発生した。担当に任せっきりになるのではなく、こまめに進捗状況を全体で共有して、計画に遅れが出ないようにしたい。

2つ目は、ワークショップの開催場所の候補出しが少なかったことである。今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、ワークショップを受け入れてもらえる施設が例年よりも少なかった。そのことを見越して多くの候補地を出すべきであったが、考えが至らず、結果として開催場所探しが難航してしまった。元々予定していた施設に断られた後、代替りの開催場所を探しているうちに計画に大きな遅れが生じたこともあった。今回の反省を踏まえて、変化する状況に柔軟な対応ができるよう先を見据えた行動を心掛ける。

7. 実施メンバー

代表者 小林 由佳（経済学部2年）

構成員 森井 琴美（経済学部3年）

福田 里緒（経済学部3年）

大久保 愛（教育学部3年）

芦田 咲月（経済学部2年）

楠 結衣（経済学部2年）

近藤 里紗（経済学部2年）

高山 佳恋（経済学部2年）

丸尾 莉永（経済学部2年）

藤島 朱里（経済学部2年）

永野 由（経済学部1年）

角田 綾花（経済学部3年）

山村 明日花（経済学部3年）

近藤 愛鈴（創造工学部3年）

家喜 あすみ（経済学部2年）

河野 智美（経済学部2年）

篠原 鈴花（経済学部2年）

槌道 由奈（経済学部2年）

山形 亜実莉（経済学部2年）

梶川 瑠璃（経済学部1年）

8. 執行経費内訳書

配分予算額		197,520円		
執行経費(品目等)	数量	単価(円)	金額(円)	備考
苔玉材料(11月分)	25		41,250	
苔玉材料(12月分)	56		92,400	
苔玉材料(1月分)	20		33,000	
苔玉材料(2月分)	15		24,750	
交通費(11月28日)	7	500	3,500	
交通費(1月30日)	6	380	2,280	
合計			197,180	